



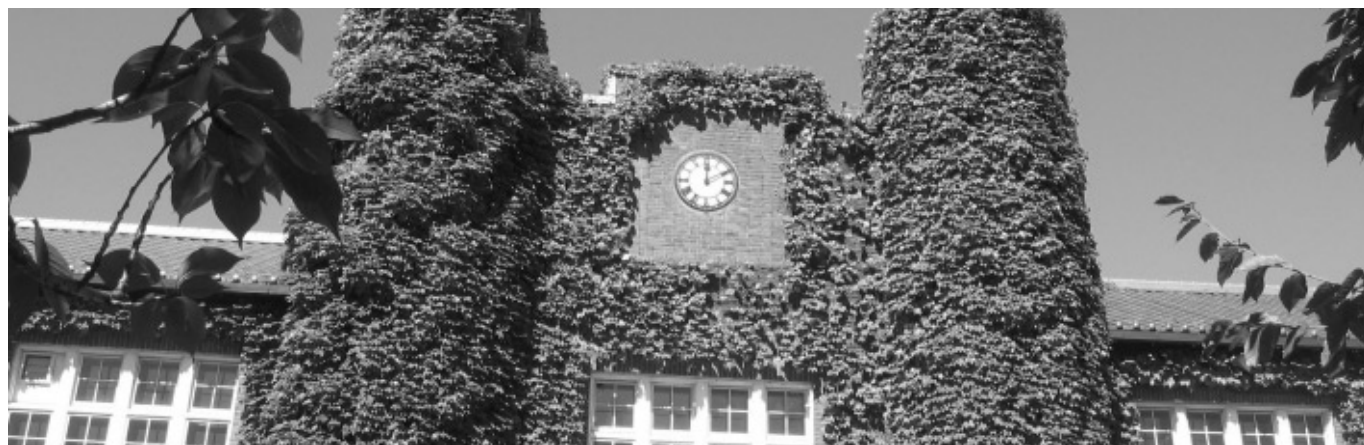
Contents

P1.2	21世紀社会デザイン研究学会設立
P3	在校生紹介
P4.5	新任教授紹介／ゼミ紹介
P6	CSRインターンシッププログラム モレンカンブ教授講演会
P7	退任にあたって 菊野 一雄 前・立教大学教授
P8	名物教授紹介「いつも矛盾を包摂して」 笠原 清志 教授

Vol.7

発行：立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集責任：笠原清志
編集長：鈴木隆雄
発行日：2006年11月15日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



21世紀社会デザイン研究学会設立

2006年6月、池袋キャンパス7号館にて、21世紀社会デザイン研究学会設立総会が開催され、正式に発足しました。

現在のさまざまな社会的課題に、政治・行政に加えてNPO、NGOなど非営利組織が台頭しています。この状況に際して、新しい時代の方向性や価値を生み出し、21世紀の市民社会をともに創りあげていく場としての学会のスタートです。

「民で公を担う、大きな社会の転換に向けて」

呼びかけ人代表 福原 義春（資生堂名誉会長）

1989～1990年代にかけて、ベルリンの壁の崩壊、インターネットの普及をはじめとして、パラダイムが変化、地球は平たくなり、日本、そして世界の社会の概念は大きく変わりました。そしてミレニアムを迎えると、大きな変化に対する期待、不安などが目の前のこととして明らかになってきました。

課題に対して数字に換算して原因や結果を分析、論理的に考えるということも、これからは、従来の方法では通用しなくなってきました。方法論において、現場ごとに違った状況が生まれようとしているのです。21世紀のそのような変化に際し、教授、学生ともに社会に提言してゆく場面が多く起きてくるのではないのでしょうか。

民が公を担う、天動説から地動説ほどの大きな転換が可能になりました。学会の皆さんの力で世の中が変わってくるのです。また、同時に研究テーマも増えてきます。私は北山

先生の声に応え、学会の発起人をお引き受けし、本日、設立にいたしました。これからご一緒に世界を切り開いていきたいと思っています。



顧問：

福原義春氏（資生堂名誉会長）
栗原彬（日本ボランティア学会代表）
林雄二郎（日本フィランソピー協会前会長）
太田達男（公益法人協合理事長）
船戸良隆（国際協力NGOセンター理事長）
山本貞雄（跡見学園女子大学教授）
加藤善次郎（日本リスコンサルタント協合理事長）

会長：

北山晴一（立教大学教授）

副会長：

浅野史郎（日本フィランソピー協会会長）
石川治江（社会福祉法人にんじんの会理事長）
出口正之（国際NPO/NGO学会（ISTR）会長）

事務局長：

笠原清志（立教大学教授）

「21世紀のグランドデザインを考える 世界に開かれた幅広い 知のネットワークの形成を」

会長 北山 晴一 (21世紀社会デザイン研究科委員長・教授)

現在、私たちの人類社会において、従来の規範や価値観が音を立てて崩れようとしています。文明的危機さえも指摘されています。また社会経済の多様化やグローバル化の進行はその危機を多様化、かつ大規模化させています。これらにいかに対応するかが社会的な課題となっています。

これらの課題を考究するために、立教大学では21世紀市民社会のグランドデザインを描き、かつ実践的に担う人材を育成する場として、大学院に21世紀社会デザイン研究科を設置しました。人権意識に裏付けされた新に共生的な社会を創成するために必要な理念と知識と技術をともに考えていくことを目的としています。

これからの市民社会の課題は、重要な課題と認識しながら検討の責任を企業や国など既存の組織に委ねるだけでなく、市民一人ひとりが積極的にかかわっていくことが要請されています。そのためにも、21世紀社会のグランドデザインを考える人材の育成をいかに行っていくかが重要です。ともにデザインを描き、速やかに実行するには、多くの人がネットワークをとりながら考える必要があります。

社会デザインを管掌する関連分野を次の7分野としていま

す。コミュニティデザイン分野、CSR分野、国際貢献・平和学分野、非営利組織分野、危機管理分野、都市防災分野、文化・芸術組織分野。21世紀社会デザイン研究学会はこれらの分野の先輩学会と協働しながら、21世紀社会デザインという分野の確立を目指します。市民と学問が一体になり、世界に開かれて伸びていくネットワークを創っていきたいと考えています。

「学会発足のきっかけは 21世紀社会デザイン研究科の設立」

事務局長 笠原 清志 (21世紀社会デザイン研究科教授)

21世紀のグランドデザインを描くことは、言葉でいうほど容易ではありません。その際にはさまざまに異なる、ときには対立するかもしれない多様な考えや立場を、いかに市民社会創成の酵母としていくかが大切です。そのための議論は大学の枠を超えて広く社会の各界、各分野の人々との意見交換の場、持続的な研究の場が必要です。以上の立場から、社会の数多くの方々の参加を得るとともに海外の研究機関や大学との連携を視野に入れたものとして、この21世紀社会デザイン研究学会の設立が必要不可欠と考えました。学会活動を通じて多様な知が統合され、多くの研究者や実務家も参加し、世界に開かれた幅広い知のネットワークの形成が可能になると思っています。(報告：進士多佳子・鈴木隆雄)

《年次大会のお知らせ》12月2日(土)・3日(日)

池袋キャンパス7号館にて開催します。大会1日目には、イタリアの社会的協同組合の専門家で、トレント大学のカルロ・ボルサガ教授の講演を予定しています。

◎21世紀社会デザイン研究学会に入会を希望する方は、所定の書類を添えて事務局にお申し込みください。常任理事会の議を経て承認となります。

学会事務局：〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長室 気付
3000227@grp.rikkyo.ne.jp

設立記念講演会

「学会に期待すること」

講師：清原 慶子 氏 (東京都・三鷹市長)

『21世紀社会で学問に期待されていることは、“課題発見”と“課題解決”です。私たちが日常で感じる様々な“ズレ”の解決方法を検討・比較するにあたって、自分たちの言葉で考えていく場や学問の力が必要となってきます。本日、設立された21世紀社会デザイン研究学会は、未来志向であるとともに、過去を尊重しつつビジョンをつくる学問を集約した学会であり、まさに“課題発見”と“課題解決”を象徴するネーミングです。

また、21社会のグランドデザインを考えていく時には、どういった社会を創りたいのかを、情熱を持って語りあうことが必要です。三鷹市基本構想の三大理念でもある、平和、人権、自治については、まさに大学や学会でこそ、学生や研究者が思う存分議論しなくてはならないことであると考えております。そして、本学会に期待することは、大いなる政策提案の場となり、国や自治体と一緒にその“担い手”にもなっていただくことです。幅広い視点を持った皆様が、それぞれの場で主人公となり、包容力と柔軟さを兼ね備えた学会運営を目指していただければと思います。』

(報告：大菅佳奈江)

在校生紹介

長岡 吾朗 さん



カナダ・オンタリオ州にて、物流企業の広報・セールスの仕事を抱えながら、現地放送局（他民族放送局）で日系カナダ人向けのテレビ番組を制作し、人種問題、アイデンティティ、ジェンダーなど様々な取材をしました。市民活動が活発なカナダは、様々な問題を抱えながらも企業や学校がそれらと上手に共存しあっている社会。様々な人種や価値観の相違

を持った人達が互いを理解しようとする多様性社会は刺激的でした。帰国後は厳しい外資系企業の広報職を渡り歩き、早朝から深夜まで無我夢中で突っ走ってききましたが、「時にはちょっと立ち止まって考えるのはいいか」と思うようになりました。そして出会ったのが「21世紀ソーシャルデザイナー」というキーワードでした。現在、カナダ時代に見てきた社会と企業の融合、また広報の新しい切り札を模索すべく「コーポレート・シチズンシップ」を研究。経験や知識を体系化し、能動的に考え、相手に伝えられるものにしていく重要性を学んでいます。これは来年修了後、すぐ仕事に生かしたいと思います。

社会人大学院生となって感じたことは、「回答は一つではない。物事には様々な方法や見方がある」ということです。仕事と学業との両立は思った以上に大変です。しかし、親身に相談に乗って下さる先生方との交流、仕事では出会えない方達と自由に意見交換を行い、志高く知的興奮を味わう体験は何事にも変えがたく、視野が広がり大変な刺激になっています。

菊池 栄 さん



昨年入学し、早くも2年目を迎えます。仕事の肩書きは「マタニティ・コーディネーター」。フリーランスの立場で妊婦さんと家族を対象にした出産準備クラスやマタニティ・ヨーガクラスを運営、指導しています。ほかにも写真を撮って写真展を開催したり、チベットからマンハッタンまで15ヶ国以上を旅してインターネットや雑誌にレポートしたり、本を書いたりしていますが、テーマはすべて「出産」です。2000年にはJICAの専門家として、ブラジルの母子保健プロジェクトに参加し、主に写真家の立場で9ヶ月間滞在した経験もあります。

20年以上この仕事を続けてきましたが、医療者ではなく先輩もいない中、仕事のスキルとノウハウはすべて独学で構築してきました。この辺りで自分自身の仕事を見つめ直し、医療とは違う立場から「出産」を理論的に再考察してみたい、アカデミックの作法を学び研究をしたいという目的で本研究科に入学しました。

少子化が問題とされ、対策はもっぱら育児の経済支援に集中していますが、「出産」のイメージと環境が女性にとって魅力的でないことも同じように危機的な状況です。母親の身体面精神面においても、かつてのようにあたりまえに産んで育てる状況ではなくなっています。少なくともとはいえず出産は年間107万件ほど。21世紀の社会が継続可能な社会であるために、次世代育成のスタートである「産む／生まれる」環境についてさまざまな分野の方々に考えていただければと思っています。

市川 智子 さん



フェアトレードを広めたい…という気持ちが強かった入学当時の私。でもそれは、フェアトレード関係者側（売り手側）の思いばかりを重視させ、「フェアトレード商品を知って（買って）もらうには、私たち（提供者側）に、何が不足しているのか」といった客観的立場からフェアトレードを考え直すということを疎かにしていました。

この研究科に在ると、NPO/NGOの存在・活動内容は、皆が知っている気分になってしまうことも私はありましたが、一步外に出てみると、NPO/NGOに対して、まだまだ理解されていない部分が多いかと思っています。そのため、フェアトレードに限らず、サービスを受けてくださる方の意見に、素直に耳を傾け、そして、一人一人の意見を、今以上に自分たちの活動に反映させることができるように努めていくことは、NPO/NGOが発展していくためには大事なことでないでしょうか。

私は、様々な社会経験を持っていらっしゃるこの研究科の皆さまと出会い、お話すことで、このような大事な「発見」をすることができました。

これからも、自らの活動を客観的に見つめなおすことを心がけながら、フェアトレードにとどまらず、様々な社会貢献活動へ、多くの方々に参加していただけるような「場」を、大好きな料理を通して、私なりに少しずつ創造していきたいと考えております。

藤林 泰 さん



職場での仕事の一つが、高度経済成長期から現在までの市民運動・住民運動・市民活動関連資料の収集・整理です。ある日、ふと、この貴重な草の根ベースの発信をテーマにして論文を書いてみようと思い立ち、団塊世代の錆び付いた頭に少々不安を抱えながらの入学でした。

でも、「21世紀社会デザイン研究科」という摩訶不思議な名前に惹かれての選択は大正解。多様な講義と多彩な教員陣で構成された一見まとまりなく見える研究科は、既存の枠組みでは解決できない閉塞感漂う時代への、多視的で学際的・民際的な手法による挑戦をしているかのようです。忙しい毎日ですが、日頃考えることもないテーマを学び、一人では読むこともないテキストと格闘しながらの心地よい興奮が楽しく、授業後の電車で揺られて帰宅する約40分は、先生の講義や仲間の発言から得た刺激と発見を反芻し、あれこれと妄想を広げる至福のひとつとなっています。きっと、電車の床には、私の目から落ちたたくさんのおウロコが散らばっているはずですよ。

およそ一世紀半、近代化への道を強固な「タテ社会」で疾走してきた日本社会が、市民の登場以後、どんな「ヨコ社会」に転換していくのか。私たちの研究科は、そんな冒険的な課題に取り組もうとしているのかも知れない…などと思うこのごろです。

新任教授紹介

五十嵐 暁郎 先生 (ゼミあり)

私の研究者としての出発点は近代日本政治思想史です。明治維新の思想史研究などに取り組みました。その後、現代日本の政治に関心を持ち、現在は法学部で日本政治論を担当しています。現在の研究はこの分野が中心ですが、政治思想史にも関心を持ち続けていますし、また現代日本政治の研究を行なうに際しても、その知識が生きていると思っています。

現代日本政治の研究では、一つにはフィールドワークを重視してきました。地方政治や住民投票の研究は、フィールドワークを中心に行ってきました。これは、高島通敏、栗原彬両教授に代表されるように、立教大学の政治学研究の特色でもあります。現在は女性の政治参加について、米国の女性研究者とともに、沖縄から北海道まで全国をフィールドワークしています。

最近では、フィールドワークは、「どこでも見てやろう」という私の性分もあり、日本国内にとどまらず、アジアやヨーロッパ、米国に及んでいます。住民投票について、ドイツやカリフォルニア、オレゴンなどを調査しています。近いうちにアジアを回ることになりそうです。

私の研究のもう一つの柱は市民社会、公共圏の研究です。これも立教大学の政治学の特徴でもありますし、今日の日本社会において必要な研究でもあります。21世紀社会デザイン研究科での授業は、この研究をNGO活動などに関心の深い大学院生の皆さんと一緒にできるのが楽しみです。



高橋 紘士 先生 (ゼミあり)

先頃発表された昨年の国勢調査の速報によれば我が国の高齢化率は21.9%となり、世界で最も高齢化の進んだ国となった。一方昨年度の合計特殊出生率は1.25となりいつ反転に転ずるかは明らかではない。また、我が国の総人口は昨年度から減少に転じ、人口縮小のなかでの少子高齢化が我が国の経済社会のあり方を規定する。この21世紀日本社会の規定要因を考慮に入れない社会構想は空中楼阁であるといわざるを得ない。このような視点で、私の本来の研究のフィールドである福祉システム再編を出発点に、21世紀社会デザイン学の構築に微力を注ぎたいと考えている。

そのスタンスは近年世を覆った市場万能主義でも、かつての古めかしい大きな政府指向でもない、新しい道であることは間違いない。その意味であらゆる前提を疑い、経済社会文化のそれぞれの場面で既存の利害とそれに囚われた思考方法を超越することが21世紀社会デザイン学の出発点でなければならない。



萩原 なつ子 先生 (ゼミあり)

私の社会人としてのスタートは、とある中規模の広告代理店の営業補佐からである。男女雇用機会均等法もない時代で、「女性」であるということで就職活動では本当に苦勞した。結局体調を崩して数ヶ月で退職を余儀なくされたが、ここでの経験が私に様々な“気づき”を与え、その後、今日まで環境問題、ジェンダー問題や市民活動団体を調査・研究するきっかけとなったのだから人生面白い。たとえば、会社に寝泊りする上司のライフスタイルを通して、利潤追求、効率優先の企業社会の中であって、男性もけっして「自分らしい」生き方をしていないということに気づいた。経済成長や健康な「男」を一元的な価値とした社会システムの枠組み、価値観をそのままにして、単に女性が男性並みに社会に参入することは必ずしも賢明な選択ではないと考えた。また購買意欲を高めるための広告・宣伝は大量生産、大量消費、大量廃棄につながっており、利益最大を目的とする企業活動や物質的豊かさを求める私たちのライフスタイルそのものが自然資源を浪費し、環境や健康破壊をひきおこしていることにも気づかされた。“どうしてこうなるの？”疑問をもつと、もうどうにもとまらない。子連れで大学に戻り、フェミニズムやエコロジー思想にどっぷりとつかり、市民活動にも深く関わるようになっていった。私の研究テーマは、すべて経験に根ざした問題意識から始まっている。それは今も変わらない。だから学生には「なぜ、どうして？」を大事にして欲しいと思う。

私の思い描く21世紀社会とは、エコロジー的にも基本的人権の観点からも持続可能な社会であり、そのような社会を構築するための新たな、そして多様な価値を創り出すこと、それが、21世紀社会デザイン研究科のミッションのひとつだと考えている。



ゼミ紹介

伊藤ゼミ

「ゼミのテーマは一言で言うなら『グローバルゼーション』！伊藤先生から次々と浴びせられる質問に対し学生は必死で考えます。留まるところを知らず次から次へ、洪水のようにあふれ出る興味深く情熱的な先生のお話！学生の要望に応じて日曜にもゼミを開いてくださる熱心な「伊藤道雄先生」自身が伊藤ゼミの自慢！魅力！宝！！

中村ゼミ

中村ゼミは現在、一年生と二年生以上に分かれて研究活動を行っています。研究テーマは多岐にわたりますが、NPOはもとより、コミュニティデザインやまちづくり、ワークショップやネットワークキングなどに関心のある方が数多く所属しています。先生を中心に、ゼミ生同士の交流が活発になされている温かいゼミです。

入山ゼミ

入山教授の長年の経験を生かされた、セクター、国境を越えて通用する視野の広さや論理構成の緻密さを身につけ、修論に結実させる的確できめ細やかなご指導のもと、各自のテーマに取り組んでいます。ゼミ、サブゼミ、合宿には各方面で活躍する多彩な顔ぶれのOB・OGも数多く参加し、活発な議論、談論が繰り広げられます。

秋山ゼミ

国防問題の実務経験者である秋山教授のゼミには、現在2年生2名、1年生5名が所属（他登録者2名）しており、安全保障の勉強と研究を行っています。ゼミの特色は、政治家・官僚へのインタビュー、合宿と防衛関連施設の見学などです。修士論文に関する教授の的確な指導や助言、行政官としての経験談などは貴重です。

門奈ゼミ

現代社会に生きる私たちの生活は、様々な情報をもたらすメディアと切り離すことができません。門奈ゼミは、流動的なメディアの現象を広い見地からアカデミックに捉える視点を修練できる場だと言えるでしょう。親しみやすいお人柄の門奈先生からは、普段の何気ない会話からも研究のヒントになることが沢山学べると思います。

北山ゼミ

自我形成、ジェンダー、身体、福祉、流行、文化政策ほか幅広い研究テーマのゼミ生が刺激を受け合いながら、テーマを絞込み、文献や資料の収集と処理の仕方、文体の選択、文章構成の順序等、論文作成に必要な指導を受けます。ゼミ生の個性に沿って適切な方向へ導いて下さる先生の姿はオーケストラの指揮者のよう。情熱的です。

佐取ゼミ

佐取ゼミでは、「身近に発生する様々な危機管理とは」とテーマの幅も広く（今人気の旭山動物園は廃園の危機からどう立ち上がったか等）、意見を交換することで自分の身に発生する危機等に気づく力が養えます。特にゼミ後の「上海」、年二回の宿泊ゼミでは修了生も来られるなど、ネットワークも充実しています。

伊勢崎ゼミ

伊勢崎ゼミ生の共通点。それは論文を書く上で、キャッチーでセクシーな文章、そしてフレッシュで面白い内容を書こうとする伊勢崎先生と同じ姿勢です。先生の研究分野は幅広くコミュニティデザイン学から危機管理学にまで及びます。ゼミ生全員が先生の「面白い論文」を追及する心に共鳴し様々な分野の研究に勤しんでいます。

川村ゼミ

川村ゼミでは、防災など危機管理分野を中心とした様々なテーマを研究しています。修士論文の作成にあたり、川村教授は幅広い知識と的確なアドバイスで、温かく指導して下さいます。テーマ設定の段階から、資料収集や文章構成などの論文の書き方に関するまで、ゼミ生一人ひとりにあわせて、きめ細やかな指導です。

福田ゼミ

組織が存続するには、社会的責任を自覚し、目先の利害に惑わされずに、判断し行動することと、その誤りの早期発見・早期対応が必要という視点で、理念、戦略、組織、方法について学び、研究しています。常識のような理論や論説にも疑問をもち、事実を追求することが要求され、大変ですが、がんばっています。

笠原ゼミ

組織論を中心に、職種も経験も異なる個性溢れるゼミ生が、実に様々な分野を研究しています。国境という枠組みを越えた先生のお話の濃さや社会の鋭い視点は感動の連続で、皆体系的に組織科学の分野を極めていきます。和やかでアットホームな雰囲気の中、先生のユーモアでいつも笑い声が絶えません。先生のご指導の下、皆で「よく議論し深く考え」ながら、互いに刺激しあって視野を広げ、21世紀の新たな価値を論理的にかつ実践的に創造しています。

マーク・カプリオゼミ

「朝鮮半島の平和構築とNGOの役割」を大きな研究テーマとして、大韓民国及び朝鮮民主主義人民共和国に関心のある院生が研究に取り組んでいます。今年開講したばかりで、21世紀社会デザイン研究科の中では最もフレッシュなゼミです。（ゼミ生の平均年齢的にも）院生2人とカプリオ先生の3人のゼミのため、コーヒークップを片手に、アットホームでこまやかな指導が受けられるのが特徴です。今は、課題文献を指定され、朝鮮半島について幅広い視野に立って研究しています。

CSR

Corporate Social Responsibility

欧州の環境監査の創始者 モレンカンブ教授講演会

「ヨーロッパにおける企業の社会的責任」

2006年5月11日(木) 池袋キャンパス立川記念館ホール

21世紀社会デザイン研究科、ビジネスデザイン研究科、オランダ大使館共同主催

今日、ヨーロッパ諸国ではオランダを含めてCSR（企業の社会的責任）という考え方に沿って、市民社会における企業の諸活動を統一、統合していく動きが広がってきています。また、CSR活動や環境関連のISO取得がビジネス取引の前提となるなど、ヨーロッパに進出する日本企業にとっても大きな課題となりつつあります。日本国内でも経団連や各企業が担当部署を置き、CSRの考え方の普及とその活動を強化しています。

今回の公開講演会は、世界有数の企業監査法人（KPMG）の設立者でもあるアムステルダム大学のモレンカンブ教授の講演、また、実際にCSRを先駆的に取り組むフィリップス・エレクトロニクス・ジャパンの高橋善郎氏による講演が行われました。

司会は中村陽一教授、開催のご挨拶は北山晴一教授、コメンテーターとしてスコット・デイヴィス教授。（いずれも立教大学）また、オランダ大使ハーメル氏、経済金融担当ボンゼル金融公使もご列席されました。



駐日オランダ大使 アルフォンス・ハーメル氏によるご挨拶

CSRに対して大変大きな関心が日本とオランダで高まっている。先端に立っている両国の経験を比較してみるのには興味深い。従業員、家族、地元社会、一般社会、そして国際社会やインターナショナルコミュニティまでを含め、官民それぞれが果たすべき役割があると考えます。オランダ政府は、諸外国の政府に訴えかけ、より多くの企業がCSRに取り組むよう、積極的に働きかけています。また政府がリードをとることもあります。日本とオランダがお互いの経験を共に学びあい世界一流のレベルの企業の経済開発の例を共有したい。

持続可能な経営と競争力をめざしてモレンカンブ教授講演

CR（コーポレートレスポンスビリティ）は

ヨーロッパ、オランダの概念が大きく発展したものである。アムステルダム大学・KPMG共同で1993年から世界の1600以上の事例調査*を行っています。この数年の急速な展開が示され、分析の報告と解説を交えた講演でした。テーマを抜粋してご紹介します。

◎CSR国際調査

「KPMG International Survey of Corporate Responsibility Reporting 2005」によるフォーチュン500社の中のグローバル250社、そして16カ国トップ100社の比較からの動向分析。トップ企業の過半数が毎年財務報告に加えてCRレポートを提出している。それによると、2005年、企業の活動数は、1位日本、2位イギリス、3位カナダ、4位フランス、5位ドイツ。02年に3位だったアメリカは6位へと大幅に後退。

◎この5年間の実際のCR展開

焦点があたってきているのは、企業の広範なステークホルダーに対する責任、環境や社会に対する責任。社会における企業の役割への期待も高まっている。特に多国籍企業は多彩な人脈や知識を持ち、政府の活動範囲を超えた活動ができるということで注目されている。つまり、企業は社会的な問題の解決に寄与できると期待されている。

◎社会的リスク

一般公衆の信頼を逸する大企業による行動が少なくない。例として、開発途上国での児童労働、森林の不法伐採、人権が侵害されている国での事業、HIVの問題、商品への有害物質混入問題が挙げられる。「社会的要求に応えることができなければ企業は大きな問題を抱えることになるということである。よりよき企業統治、透明性、説明責任を求める声が一段と強まり、信頼の回復が急務となっている。

◎大企業は社会問題解決に寄与可能か

「企業は犯罪、貧困、教育の欠如などについて対処できるのか」についての調査では、過半数の人が肯定。また、社会の諸問題に積極的にあたる企業は、パートナーとしてNGOと連携するようになってきている。

◎学習と革新、価値の創造

CRをより見えるように体系的に扱う。企業活動の原則として、「環境を大事にすること」「社内外の人を大事にすること」そのことが社会的な価値を見出すようになってきている。さまざまな責任に対して、バランスのとれた対応と、その報告で透明性を高め信頼を得ることが、新たなビジネスチャンスの獲得につながる戦略的マネジメントが必要だと言える。

◎動機付けとしてのCR

有能な人材の獲得において、「会社が何をしているか、責任ある対応をする会社か」を明らかにすることが有効。また金融機関からの融資・投資においても、利益優先ではなく環境上のリスクや企業責任を果たす姿勢が、審査の基準として重要視され、そのことについて、株主からの圧力がある場合もある。

◎持続可能性・CR活動・財務

財務面について、CS、持続可能性を果たしている企業はリーダーシップを示し株価の面でも他の企業に比べて高いパフォーマンスとなっている。SPI（社会的責任投資）ファンドも登場、活発になってきており、今後重要な分野になると思われる。

◎将来への流れは価値を創り競争優位につながっていく

地域により企業のCRの視点が違うことには注意しなければならない。ボランティアが重視される場所、地域での貢献が重視される場所、さまざまである。日本の企業の場合、自然や社会との調和が基本になるように見える。従業員や顧客、そして製品を大事にする、環境をまず考え製品開発するなど。さらに大きな社会的なものに発展していかだろう。



◆モレンカンブ教授 プロフィール

Prof. George Molenkamp

政府での環境行政従事者のあと、監査法人KPMG設立、ヨーロッパにおける環境監査の生みの親と言われている。国際基督教経営者連盟主要メンバー、各種経済団体役員など歴任、研究教育面で大きく活躍しておりウォールストリートジャーナル、タイムズに多数の論文を発表している。現在、アムステルダム大学ビジネススクール教授。

（報告：進士多佳子・平田賢典）

退任にあたって 菊野 一雄

前・立教大学教授 現・跡見女子大学大学院 マネジメント学部教授



菊野 一雄先生

◆ 研究者になられたきっかけ

Q 先生がご専門の労務管理・経営学に入られた経緯などをお聞かせください。

父親が台北帝国大学医学部教授で僕を医者にしたかった。但し、僕は理科系が嫌いで、慶應義塾高校から大学へ進学する際に経済学部を志望したが、肺炎で入院したため期末試験の準備が出来ず商学部へ推薦されたのです。商学部は経済学部から独立して4年目、経済学部は慶應の看板なので行きたかった。しかし、そんな僕に祖父が「鶏口となるも牛後となるなかれ」とボンと言ったのです。そうか、自分は小さい鶏かもしれないけれど、新しいところで頑張ろうと思ったのです。

ゼミが労務管理論で、助手の先生がマルクス経済学でした。その頃、ローマ法王ヨハネス23世が「パーチェム・イン・テリス」という回教を発表し、社会主義を敵視してはならないという新しい発想を提起しました。いろいろな大学の人たちとその翻訳やマルクスの「資本論」を読んだりしているうちに、「学問の世界は面白そうだな」と思い大学院に進みました。ドクター3年修了時に、慶應の先輩で武蔵大学教授の方から空いているポストがあると聞き、武蔵大学へ行きました。それ以来、僕は実社会へ出て働いたことはなく、ある意味で純粹培養で、世間知らずだと思います。

◆ 立教大学と21世紀社会デザイン研究科を振り返って

Q 21世紀社会デザイン研究科について、思うことなどをお話ください。

立教には29年在籍しました。特に経済学研究科から21世紀社会デザイン研究科に移った際にはカルチャーショックを受けました。ずっと大学にいた人は北山先生と笠原先生と門奈先生くらいで、他の先生は実社会で豊富な経験を積まれた方ばかり。院生も僕と同じくらいの人から若い人までバラエティに富んだ人々がさまざまな社会経験を持っている。それはすごく刺激的でした。人的イントラネットもすごいですね。入学後すぐに先輩も交えて歓迎会をやる。修士論文の審査とか予備の報告会とかも面白いですね。真剣勝負で、皆言いたい放題言うなんて、既存の大学院ではなかなかないですよ。教師と1対1だけでなく、皆といろいろなネットワークを張れる。これって素晴らしいことです。

21世紀社会デザイン研究科の院生は実社会の経験が豊富で太っ腹の人が多。ちょっと褒めすぎかな。

21世紀社会デザイン研究科のスタッフには私利私欲に走る人がいないですね。私心を先に立てる人がいると疑心暗鬼が横行して

組織が活性化しません。実社会で豊富な経験をしてから21世紀社会デザイン研究科に来られた方々はすごく献身的だし純粋です。そのことを僕は21世紀社会デザイン研究科にきて強く感じましたね。

◆ 現在のお仕事について

Q 跡見学園女子大学大学院のキャンパスライフはどんな感じですか。

一番ショックを受けたのは、入学式の日学バスに乗ったら、男性は僕だけで、運転手さんもたまたま女性で、他も全部女子学生でね。大学院は文科省の制度では、男子にも開かれています。現在は5人全員女性で、区議会議員とかアート・コーディネーターなどのユニークな人材がいます。マネジメント研究科というのは立教の21世紀社会デザイン研究科と非常に似ています。危機管理もありますし、文化芸術的なところもある。それで21世紀社会デザイン研究科と単位互換制とか色んな提携をしませんかという話が進行しています。今度出来る21世紀社会デザイン学会には山本真雄研究科委員長(学会顧問)をはじめ跡見の人々も沢山入ります。6月24日の設立総会には、跡見から教員や院生が出席します。7月8日の立教1年生の修論の経過報告会に、跡見の院生も参加できるように、今交渉中なんです。そこまで話ができていて、ゆくゆくは共同のシンポジウムとか講演会とかをやるということまでできています。

◆ 21世紀社会デザイン研究科に期待されること

Q 最後に、21世紀社会デザイン研究科に期待されることなどをお願いします。

僕はさらに、21世紀社会デザイン研究科が外に向けて、もっとネットワークを張っていく、今はやりの、ユビキタスを目指していくという、その先鞭をつけることを期待しています。その一里塚としての「21世紀社会デザイン学会」がいよいよ始まるし、それに僕も参加できるので嬉しいですね。もっと社会にいろいろ発信して、いい意味でのユビキタスになってほしいと思います。

僕自身もうちょっと余裕ができれば、また21世紀社会デザイン研究科で授業を担当して皆さんから刺激を受けたいですね。21世紀社会デザイン研究科の先生たちからは「また来てよ」っておっしゃっていただいているので、21世紀社会デザイン研究科に戻れる日が実現することを待っています。この立教のニュースレターを跡見でもぜひモデルにさせていただきたいと思います。跡見と一緒に作ってもいいですよ。号外とか、そういうネットワークをどんどん張っていきましょう。(聞き手:鈴木千秋)



私は産業社会学を学び、現在は学部、大学院では組織論を担当しています。そこにおいては、いつも組織を構成する人間というものに焦点をあてて考察してきたように思います。

研究テーマや方法論というものは、その時代の影響や、先生、そしてすばらしい人や文献との出会いによって大きく変化していくものです。私の場合、石川晃弘先生の「生活の中の社会主義」論や熊沢誠先生の「労働者自主の思想」に影響を受けて、1970年代末にユーゴスラビアのベオグラード大学に留学し、労働者自主管理制度について勉強しました。この時の研究が、後に私の博士論文になりました。労働者が自主的に意思決定を行い、工場、企業そして社会を運営する、このようなイデオロギーには社会主義

の初期の理想だけではなく、近代の官僚制や企業社会の現実には押しつぶされてしまいそうな労働者、会社員といった組織にとらわれた人たちの夢もそこに投影されていたのかもしれませんが。しかし、理念と現実の乖離、経済の崩壊、民族主義の台頭の中で、ユーゴスラビアの労働者自主管理制度は混乱、対立、憎悪そして内戦の勃発の中で崩壊してしまいました。

このような経緯もあって、私の組織研究は効率中心の経営組織論にはどうもなじめず、その都度、分析の新しい枠組みを求めながら試行錯誤を繰り返してきたように思います。結局、今日では文明史論的立場をふまえて人間というものに焦点を当てるようになってきたと思います。このような立場は方法論的には難しく、院生の論文指導では多少、矛盾した立場を使い分けるような形になっているようにも思います。つまり、NPOやNGOを専攻しようとする人には官僚制組織の重要性を指摘し、他方、そうでない人には人間の持つ自発性や志、そして理想というものが組織行動や変化の面でもつ重要性を強調するというものです。しかし、人も集団も組織もこの種の矛盾をつねに包摂し、悩み葛藤するプロセスから何かが生まれ、進化していくものなのかもしれません。

21世紀社会デザイン研究科は、新しい社会のデザインを求め多様なキャリアや夢を持った院生が数多く集まっていると思います。そのようなデザインや夢が実現されるためには、何が必要なのかという事を常に一緒に考えていきたいと思っています。

講演会

11月15日(水) 7102教室

団塊世代が参画する 地域創造の可能性

コミュニティデザインへの新たな視点

講師:

福嶋浩彦(我孫子市長)、
田中高輝(社団法人長寿社会文化協会常務理事)

コーディネーター:

高橋紘士(本研究科教授)

12月2日(土) 7101教室

社会的企業が拓く サード・セクターの 新しい地平

イタリア・トレントの社会的協同組合の経験から

講師:

カルロ・ボルザガ
(イタリア・トレント大学経済学部教授)、
モニカ・ロス(トレント大学ISSAN研究所研究員)、
マイケル・オドリツィ
(コン・ソリダ会長、FTC副会長)

コーディネーター:

藤井敦史(本学コミュニティ福祉学部助教授)

2006 SCHEDULE

9月20日(水)	後期授業開始
9月27日(水)	9月27日~30日 履修届(A)受付、CSRインターンシップ 希望届(1年次生)
10月21日(土)	◆秋季入試 筆記試験・口頭試問
10月22日(日)	◆秋季入試 口頭試問
11月 1日(水)	秋季休業(学園祭) 11月1日~7日
11月 8日(水)	11月8日~11日 修士論文・研究報告書仮提出
11月11日(土)	公開授業ウィーク 11月11日~17日
11月25日(土)	◆進学相談会 太刀川記念館 13:00~
12月16日(土)	16:30~集中演習ガイダンス、懇談会:太刀川、18:30~懇親会:山小屋
12月24日(日)	冬季休業開始
12月25日(月)	後期集中講義期間 12月25日~27日
1月 5日(金)	冬季休業終了
1月 9日(火)	1月9日~13日 修士論文等提出期間
1月16日(火)	後期授業終了
1月17日(水)	後期集中講義期間 補講期間 1月17日~26日
1月22日(月)	1月22日~2月3日 学年末試験開始
2月 2日(金)	◆2月2日~3日 修士論文・研究報告書審査会(最終審査)
2月24日(土)	◆春季入試 筆記試験・口頭試問
2月25日(日)	◆春季入試 口頭試問
2月28日(水)	修了者発表
3月23日(金)	18:30~大学院学位授与式(全学)、修了証書授与式(研究科別)、修了祝賀会(全学)

【編集後記】

2006年度は、21世紀社会デザイン研究会も設立され、ますます当研究科の社会における役割が期待されます。私たち編集委員一同も、まさに、日々、非常営利、社会組織、危機管理、ネットワークを編集活動を通して実践しながら奮闘しています。



今号の主な担当スタッフ

笠原清志(編集責任者)
鈴木隆雄 滝沢千代里
平田賢典 林亮 鈴木千秋
斎藤直子 北原正代 進士多佳子
原裕人 真田尚剛 大菅佳奈江

[21世紀社会デザインセンター]
斎藤啓子 小林則男 高田靖子